

「家がいいね」 第168号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2018.5.4

こんなはずじゃなかった

この言葉を思い出したのは在宅医同士の会話で。大先輩早川一光（かずてる）さんが92歳で自ら在宅医療を受ける立場になり、新聞やTVの取材でこう発言されているとの話です。



早川さんは愛称「わらし医者」で有名な人です。戦後まもなく、京都西陣で住民と共に堀川病院を作り、在宅医療もなかった時代に、積極的に地域に出る活動を展開されました。「西陣の路地は病院の廊下や」を合言葉に、病院外でも安心して医療を受けられる体制を整えました。その人が多発性骨髄種での骨折のため、高齢で初めて入院経験をしました。退院後は自らが作り上げた在宅医療の仕組みに支えられ自宅で暮らす生活です。しかし「人の世話になって生きるとは、これほど居心地の悪いものなのか。自分が健康だった時、患者の気持ちは分かったつもりで、本当は分かっていたのではないか」そして「僕は何をしてきたんやろう。」

『在宅は天国や』と言ってみんなを、わあっと煽ってきたけど。実際に天国なんかかな？天国かと思ってもね、地獄じゃないか」この先輩の言葉は心に沁みます。



「夜が怖い。病気になるって初めて感じたことです。病気をしてから僕は携帯電話を握りしめ眠りにつきます。かかってくる電話に出るためではありません。せん。かけるためです。夜が更けても眠れない時、人が恋しくなり人の声が聞きたくなった時のために、これがないと安心して眠れなくなりました。『もしもし大丈夫？』電話の向こうから聞こえてくる言葉は、睡眠導入剤より、ほっとするのです」本当に率直で、誠実な医師ですね。尊敬します。早川さんは患者となった今、胸に浮かぶ思いを「**こんなはずじゃなかった**」という言葉に表しているのでしょう。その言葉の奥には「**もっと良いものにできるはずだ**」と言う、あとに続く人たちへの期待が込められていると、私は受け止めます。

先の世は、どんなもの？

西国5番札所の葛井寺（大阪府藤井寺市）です。過去から引き継ぐものは、このように目に見えている。将来へ引き継ぐものは、想像するのも難しい。人口の少ない社会から、現代まで来たというのに**2025年問題**の総人口減少社会への想像と対応は、不十分なままです。



団塊以前の世代は「いつまで生きるのか」という長寿化の不安と、社会保障制度への不信から、必要以上の資産を貯め込み、結局は死蔵に繋がる状況です。相続する子供世代が蓄積を使い果たす**2050年問題**が更に深刻になるようです。その時は高齢者の中で貧困層が半数を占め、社会保障が追いつかない予測もあります。イナゴに例え個から大量の群になり社会資産を食い尽くす危惧も示されます。人口が減少し高齢者が多数を占める社会の到来の前に、利己より利他が求められるようにすべきですが、人間とは変わり難いものです。**こんなはずじゃなかった**と何時、気がきますかね。

変えるのは今の自分

旧日赤3階病棟も姿を消しました。昭和13年新築だったので人間より短い寿命なのでしょう。

在宅医療は人の一生と付き合う中で、長い歴史を知るようになります。

看取らなければ始まることもなかった家族史も、その経験の中に在ります。



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御薗町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
ホームページ <http://isezaitaku.com>

↑バックナンバーはここで閲覧可